國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕手塚雄太著『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容：「憲政常道」から「五十五年体制」へ』

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 米山, 忠寛, Yoneyama, Tadahiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000378

〔書評〕

手塚雄太著『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容 —「憲政常道」から「五十五年体制」へ—』

米山忠寛

本書は政党と政党支持基盤をテーマにして、時期としては昭和戦前から戦時・戦後を対象としている。また史学から政治学へと視野を広げた工夫の為された著作である。標題からは投票行動分析などの政治学を中心とした研究との印象も受けるが、実際には史学を研究の基盤として、昭和戦前期の研究上の知見を用いている点に特徴がある。多様な工夫が為された意義を解説するのが本書の書評の重要な役割であり、書評のし甲斐のある著作とも言える。まず本書の概要を紹介したい。本書は前半三章の第一部と後半四章の第二部で、手法も対象も大きく分かれている。

序章では、戦前・戦時・戦後の先行研究を概観しつつ、支持基盤・利益団体の研究に焦点が向けられている。

第Ⅰ部「戦前期二大政党の模索と帰結」が前半三章である。第一章では、昭和初期の二大政党の経済政策論争について、政友会・山本条太郎の産業政策を中心に扱っている。山本の産業五カ年計画は簡易な計画であったものが徐々に政策上の標語となり、経済への政党の関与を象徴するものとなっていった。第二章では、斎藤岡田内閣期の農村問題が対象とされる。農村の意向は利益団体に集約され、対峙する政友会と岡田内閣の双方にとってその支持や動向は関心の対象となった。政友会の「爆弾動議」は利益団体へのアピールの一例である。政党内閣が中断した後の政党にとって利益団体の支持獲得は重要なものだった。第三章では、利益団体間の調整に苦労する政党の姿を示す。農村利益・〈産業団体—反産運動〉・税制改革・国民健康保険法案（医師会）、などこの時期の政策上の諸問題について利益団体間の衝突があり、政党はその代弁・調整に苦慮することになる。

第Ⅱ部「代議士の支持基盤からみた戦前と戦後の連続と断絶」が後半四章である。第四章では、昭和の戦前戦後に活躍した代議士（衆議院議員）加藤鐐五郎の活動を資料から分析している。後援会五月会や機関誌『時事公論』の分析を中心に、初期の国

政進出から愛知県政友会系政治家としての加藤の選挙活動を論じている。第五章では、加藤を通じて戦時期の政治家と利益団体の関係の事例分析を行っている。特に愛知県の重要産業である陶磁器業界に関して、戦時の経済統制や団体間の紛争に際して加藤の政治力に多くの期待が寄せられる様が描かれる。第六章では、戦後公職追放後の加藤の政治活動・営業活動を分析している。大臣を目前とした有力政治家だったはずの加藤は公職追放により、地域での陶磁器業界からの支持が弱まり代わりの支持基盤を求めるなど、一見すると戦前からの強固な地盤に見えても、支持基盤の内情は大きく変化していた。第七章では、政界復帰後の加藤が入閣に向けて運動し、中京財界の献金集めなどに奔走する姿が描かれる。支持地盤では陶磁器業界の支持は継続したが、医師会については地元愛知県での支持はありつつも中央では武見太郎と対立した。また後援会五月会は存続しつつも革新陣営の伸張・保守陣営間の争奪といった情勢変化が起こっていた。

終章では、犬養総裁期の「政治と生活」への政友会の模索から、政党支持基盤へと、戦後55年体制の出発点として分析してきたとまとめられている。

概要をまとめると、まず第一部では対象は「政党」、時期は「戦前」である。主に昭和戦前期の政友会・民政党の二大政党に対して利益団体が政策実現を期待し求める状況が論じられ、政党と利益団体の関係について様々な事例分析されている。続いて第二部の対象は「議員」、時期は「戦前から戦後」となる。加藤鎌五郎に焦点を当てて加藤の選挙区での支持基盤や後援会組織を時系列の中で扱っている。当時の中選挙区制の選挙区内での議員と団体の関係が分析対象となる。

第一部と第二部で時期も対象も広がりを持ち、多様な分析視角から政党や議員の支持基盤について分析を行っている。本書では研究上の新しい視点が各所でさりげない形で示されており、著者のセンスが感じられる。本書全体についての明示はされていないものの隠れたテーマが「職能代表」や「階級」だろう。戦時期の改革構想の中では貴族院への職能代表の導入が検討され、結果的に戦後の参議院に繋がった。その変化が本書と並列して存在している。本書の読者は職能代表や階級、共産主義・社会主義の影響を視野に入れておかねばならない。それに気付かぬままとすれば、大袈裟に言えば誤読となる。

著者は恐らくは意図的に社会主義や階級には触れていないが、本書全体のテーマである利益団体からの支持の確保や政治的支持基盤の確立は、この時期の普通選挙導入後の状況に対応

した「組織化」や社会主義の存在と表裏一体と言える。これは〈近代：政治的に「自由な個人」による政治活動〉→〈現代：階級・階層・団体など「組織化された集団」による政治活動〉の間の変化とまとめることができそうである。

その意味で本書はまさに「近代」から「現代」への変化を扱っている。第二部では戦前の流動化し得ていた支持基盤が、自民・社会・公明・民社・共産など各党の下で組織化されていく過程が示される。労働組合・宗教団体・後援会、と手法は様々なれど、先駆的な後援会組織を構築していたはずの加藤が他候補の組織化に脅威を感じていく様を的確に描写している。戦前の加藤は社会大衆党などを横目に見ながらも支持を固めて普通選挙に対応すれば良かった。それが戦後には、労働組合に取り込まれていない限定された利益団体を囲い込まねばならなくなっていく。加藤と同選挙区には民社党・春日一幸が出現し脅威となった（二三六頁）。それは単なる興味深いエピソードというよりも本書全体の本来の隠れた主題を示しているとも言えるのである。

個別の各章における成果としては、第三章と第五章が研究の画期となり得る研究であると評者には思われる。まず第三章である。昭和戦前期の政党政治の凋落期において、二大政党が利益団体からの要求に応えきれずに翻弄される状況が示される。所謂政党政治の崩壊に直結した形で理論的な発展可能性がある視点なのだが、本書では第二部で加藤に話が切り替わって結論は出ていない。その点は物足りなさも残り、ここで示された視点が今後どのように研究史の中で発展できるか注目したい。

次いで第五章である。戦時期の代議士と利益団体の関係は、戦時議会の研究の中で重要な位置を占めている。つまり、軍部に政治的実権を奪われたかの様に見える旧政党政治家の戦時期における役割をどう考えるか、という研究上の論点である。これは近代日本の政党政治研究全体の性格規定に関わる問題であり、既に古川隆久・官田光史などによる研究がある。本書第五章では、加藤が出身母体ではなかった陶磁器業界が、戦時下に政治力を弱めていたかに見える代議士の加藤に取り纏め役を委ね取り込んでいく過程が描かれている。代議士の役割規定を中央政界とは異なる利益団体の側の視点で示しており、既存の構図から研究を大きく進め得るものと考えられる。

ただ本書にも懸念がないではない。第一に、史学に基礎を置きつつ政治学に関連付けようとする意欲が些か急で、戦後政治全般への回答を急いてはいないか。対象時期も論点も戦後政治に一般化して論ずるには不足が見える点もある。政治学との両

睨みが構図を拡散させた面もあるかもしれない。第二に、事例研究で成果を挙げる一方で、網羅性や一般性をどこまで示そうとしているのかが見えにくい。分析が優れていればいるほど読者に迷いが残る。つまり第二部は加藤鐐五郎資料の素材の良さを活かしてとても面白い内容だが、加藤という素材の面白さは分析の面白さとは別物の様にも思われる。加藤に依拠せずに、著者の主張を軸にして描いたならばどうなるのか。その点は第三章で示された構図の発展などを用いて今後著者自身が発展解消してくれるものと期待したい。

以上論じてきた様に、本書は史学・政治学の双方に深い示唆を与えてくれる好著と言える。今後の各分野の研究の発展にも寄与する所が大きいと考えるものである。

（A5判、三四四頁、ミネルヴァ書房、二〇一七年三月発行、定価七〇〇〇円＋税）